

『資本論』第2部第2稿と第8稿の 再生産論（反論）

伊 藤 武

は じ め に

早坂啓造氏は、雑誌『経済』2009年2月号に「『資本論』第Ⅱ部第三編の編集稿とマルクス稿の比較」と題した論文を寄稿した。筆者はそれを読んで早坂氏の第Ⅱ稿と第Ⅷ稿との関連について誤解があると思い、本誌第60巻第2号（2009年7月）に「『資本論』第2部第2稿と第8稿の再生産論」と題した論文を寄稿して、早坂氏の見解を検討した。その後、早坂氏は昨秋関西大学で開催された『経済理論学会』で筆者の早坂氏批判に反論し、さらに『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第52号（2010年12月）に「『資本論』第Ⅱ部第3編の構成をめぐって——MEGA² II/13の編集過程から見えてきたもの——」と題する論文を掲載し、早坂氏自身の見解を再論しつつ、筆者に反論されている。

本稿は、早坂氏の反論に答えるものである。

1. 2つのマルクス草稿とエンゲルス編集『資本論』第Ⅱ部との 構成比較——早坂氏の問題意識

『資本論』第Ⅱ部第3編は、周知のように、マルクスの『資本論』草稿の第Ⅱ稿と第Ⅷ稿から編集されているが、早坂氏の問題意識の中心は、エンゲルスの編集を、

「a. 第Ⅱ稿にしかなく、そこから採用されている部分——第18章、第19章の3、第20章のⅠ（一部だけ第Ⅷ稿）、2、6-9、13の各節

b. 第Ⅷ稿にしかなく、そこから採用されている部分——第19章の1、第20章の10、11、12、第21章

c. 両稿に重複存在するが、第Ⅷ稿から採用されている部分——第19章の2、第20章の3—5、の各節

d. 両稿に重複存在するが、第Ⅱ稿から採用されている部分——第20章の第12節の一部

e. 第Ⅱ稿にしかないが、採用されていない部分——「貨幣なしの流通」のかなりの部分と、いわゆる「6 亜部門表式」の部分¹⁾に区分し、「一見して明らかな採用上の空白——「貨幣流通なしの叙述」——の大部分が、なぜ採用されなかったのか、という疑問がまっ先

1) 早坂啓造氏『資本論』第Ⅱ部第3編の構成をめぐって——MEGA² II/13の編集過程から見えてきたもの——『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第52号、76ページ

に浮かび上がるのですが、この点についても、エンゲルスのよく知られている序言「第Ⅱ稿では、まず再生産がそれを媒介する貨幣流通を顧慮することなく取り扱われ、次にはこれを顧慮してもう一度取り扱われていたのである。このようなことをなくして、一般にこの篇全体を著者の拡大された視野に対応するように書き直すことが必要だった。こうして第Ⅷ稿ができあがった……」(MEGA² II/13, S.11-16)という一文があることによって、この「貨幣流通なしの叙述」の除去は、ほとんど自明のことと見なされてきたといえます。],「しかし、それは本当にマルクス自身の意図に沿ったものだったのか、というのが、II/13の第3編を編集するに当たっての仙台グループの議論の出発点でした。」²⁾と、これが、仙台グループはいざ知らず、早坂氏の問題意識である。

そのほかにも、早坂氏は、編集上の問題点として、「第19章第2節相当部分を書き直したのは何故か、両稿にはどんな相違があるのか、第19章3節相当部分をマルクスはどのように扱おうとしたのか、第Ⅱ稿の「貨幣なし」・「貨幣あり」の区分もさることながら、「消費手段生産部門」・「生産手段生産部門」の叙述区分をマルクスはどう扱おうとしたのか また、その叙述を経た後に表式提示を初めて行っている第Ⅱ稿の順序を、第Ⅷ稿執筆に際してどう処理しようとしたのだろうか、「6重部門表式」の箇所をマルクスはどう位置づけしようとしていたのだろうか、蓄積の取り扱いはどうであったのか、均衡の諸条件の検出が主眼であったのか、貨幣資本の形成、蓄積基金の形成が主題であったのか、等々が主なものです。」³⁾と、エンゲルスの編集ばかりではなく、マルクスの草稿そのものについての早坂氏自身の疑問点を列挙している。これが早坂氏の問題意識である。

ということは、早坂氏は、マルクスの改稿、1861—1863年草稿におけるケネー「経済表」の検討をはじめとする再生産論研究を別とすれば、第Ⅱ部第Ⅰ稿、第Ⅱ稿、第Ⅷ稿と書き継がれてきた再生産論のマルクスの研究の進化を理解しなかったことを示しているのである。

2. 「後段のための先取り」——何のための先取りか、「後段」とは何を指すのか

早坂氏は、「採用上の空白」すなわち第Ⅱ稿の「貨幣流通なしの叙述」の大部分が何故採用されなかったのかを問題としている。この問題が早坂氏の問題意識の根幹をなすものであるが、この問題は、マルクスに対するものではなく、第3部の編集者エンゲルスに対するものである。

早坂氏は、この問題を解決する鍵は、第Ⅷ稿の単純再生産論の中でのスミス批判の後に書かれている「Anticipiertes für das Spätere」という文言に注目して、「「後段」とはこの第Ⅷ稿の後ろの部分の意味しているので、紛れもなく「固定資本の更新」と「拡大再生産」を指しており、再生産における貨幣の自立的運動、とりわけ貨幣の積み立てと投下をとまなう独自の動向を、初めて正面から取り上げるために、いわばその「導入部」として、

2) 早坂氏、前掲稿、77ページ

3) 同上ページ

「現行版第20章第Ⅲ-V節部分が書かれたのだ」⁴⁾と、前稿で述べたのだと主張している。

つまり、早坂氏は、マルクスは第Ⅷ稿で単純再生産論の中での「固定資本の更新」が再生産における貨幣の自立的運動を始めて正面から取り上げたのだとしているのであるが、「固定資本の貨幣補填と現物補填」は第Ⅱ稿にはなく、第Ⅷ稿で初めて取り上げられたものであり、一方での償却資金の積み立てと他方での現物補填の説明は、「貨幣流通なしの叙述」では取り上げられるべくもなかった問題である。ここに、マルクスの再生産論の深化があるのではあるが、しかし、早坂氏は、第Ⅷ稿において単純再生産分析で新たに付け加えられたのは「固定資本の更新」だけであるとし、第Ⅲ-V節は第Ⅱ稿の「貨幣流通の媒介を伴う叙述」の単なる書き直しであると見なしているのである。マルクスが、第Ⅱ稿での「貨幣流通の媒介を伴う叙述」と「貨幣流通の媒介なしの叙述」という二分法を止揚して、最初から貨幣流通を顧慮して再生産論を展開しているのは、マルクスの自己批判であるが、それは第Ⅰ稿から引き継いだ「収入と収入の交換」、「収入と資本の交換」、「資本と資本の交換」という再生産論展開を揚棄したのは、何よりも可変資本と労賃との関係を明確にするためであったのである。

早坂氏は、こうしたマルクスの自己批判、再生産論研究の深化を認めず、そうした伊藤の把握は、「その場合、第Ⅱ稿以前にはそのような把握はなかったという伊藤さんの認識が前提になっているのです。」、ところが、第Ⅱ稿の「媒介する貨幣流通を伴う叙述」を子細に呼んでみますと……「資本家Ⅰ（総資本家Ⅰ）は、100£の貨幣を労働者Ⅰ（総労働者Ⅰ）に支払い、それによって彼の資本の一部を可変資本に、つまり彼の生産資本に合体されて活動する労働力に、転化する。彼は今や、労働力を生産的に消費せねばならないし、労働者たちは、100£を個人的に消費せねばならない。つまり、収入として支出せねばならない。」（MEGA² II/11, S.424.16-21）という叙述があり、伊藤さんが第Ⅷ稿で初めて現われるという可変資本の循環（転換）と労賃（労働者の収入）の運動との峻別が、第Ⅱ稿でもなされていることが、はっきり読みとれます。」⁵⁾と述べて、拙論の根拠は揺らいで来ることになると批判している。

第Ⅱ稿でそうした把握がなされたことが、第Ⅷ稿での改訂の転機となっていることを認めることにやぶさかではないが、可変資本と労賃との関係は、第Ⅷ稿の単純再生産論の主要課題であったことは、この問題の提起がすでに第Ⅷ稿のスミス批判の中で行われており、第Ⅷ稿の単純再生産が両部門間の転換から始められ、その際、「この転換は、貨幣流通によって成立するのであって、この貨幣流通は相互転換を媒介するとともに、その転換の理解を困難にもするのであるが、しかし、それは決定的に重要である。」と述べて分析を始めているのであり、エンゲルスが「第10節 資本と収入——可変資本と労賃」と題して、順序を変えて収録しているのであるが、これはマルクスの単純再生産分析の結語であったのである。早坂氏は、こうした単純再生産分析の主要課題、マルクスの分析の深化を理解

4) 早坂氏、前掲稿、77-78ページ

5) 早坂氏、前掲稿、78ページ

しなかったのである。第Ⅷ稿の特徴は、両部門間の転換と第Ⅱ部門内部での転換だけが取り扱われているということである。この分析で取り上げられているのは、可変資本の転換とそれと絡み合う労働力の転換である。したがって、マルクスは、第Ⅱ稿での二分法を、第Ⅷ稿で揚棄したのである。早坂氏は、第Ⅷ稿の叙述は第Ⅱ稿の「貨幣流通を伴う叙述」の単なる書き直しと見て、マルクスの理論的深化を無視しているのである。

エンゲルスは、そうしたことから第Ⅱ稿とは異なる第Ⅷ項の分析視角の転換を読み取ったのであろう。第Ⅰ部門の「不変資本」の補填は第Ⅷ稿に含まれていなかったのも、エンゲルスは第Ⅱ稿から持ってくるほかはなかったのである。

第Ⅱ稿と第Ⅷ稿の分析視角が転換していることを読み取ることは、比較的容易であるが、早坂氏は、マルクスの第Ⅱ稿とは異なる第Ⅷ稿の新たな分析視角を読み取ることができないのである。それ故、早坂氏は、あくまでも第Ⅱ稿の「貨幣流通の媒介なしの叙述」に固執して、「第Ⅷ稿が、本来書かれるべきであったはずの何に先立って書かれているのか、という問題に進んで、私がそれは「貨幣抜き」の叙述だといった」⁶⁾のだとしている。早坂氏は、「貨幣流通抜き」の叙述に、「媒介する貨幣流通から独立して部門内部および両部門間の交換を規定する諸問題」ないし「本質的諸要素が存在する」ことが明らかにされるというのであるが、そもそも、再生産論は社会的総生産物の転換をとおして再生産の諸条件を明らかにすることが課題であるが、この転換は総生産物の貨幣への転化と、総生産物が転化した貨幣が不変資本、可変資本に再転化されることによって、再生産が可能になる。従って、貨幣流通の媒介なしには実現できないのである。それ故、「貨幣流通の媒介なしの叙述」は非現実的想定にすぎない。それと同時に、「貨幣流通を伴う叙述」では貨幣は単なる媒介、流通手段として捉えられているのである。

しかし、早坂氏は、「にもかかわらず、もし「貨幣なし」の叙述部分を切り捨てるのだということになれば、それには相当の理由があることになり、マルクスはその「切り捨てる理由」を説明しなければならないことになるはずです。しかも、マルクスは、第Ⅰ稿でも第Ⅱ稿でも、口を極めて、「(最終的な叙述ではこの第Ⅰ節を(Ⅰ)総再生産過程における商品資本の現実的素材的変換、(2)この素材的変換を媒介する貨幣流通、という2つの部分に分離した方はよいであろう。今そうになっているように、貨幣流通を考えに入れることは、絶えず展開の脈絡を破ることになるからだ)」(Ms.1. 原 S.114; MEGA² II/4.1 S.314.26-30)といい、「最後に問題をもっとも単純な諸条件に戻すために、さしあたり、貨幣流通から、したがって資本の貨幣形態からも、まったく切り離す *abstrahiren* 必要がある。流通する貨幣量は、明らかに、それが流通させる社会的生産物のいかなる部分をも形成しない。したがって、もし総生産物の価値がどのように不変価値等々に分割されるのかが問題となるならば、この問いそのものが、貨幣流通には関係がない。問題を貨幣流通への顧慮ぬきに取り上げた後にはじめて、現象が貨幣流通に媒介されたものとしてどのように現れるかが考察されるべきである」(Ms.II. 原 S.142.; MEGA² II/11, S.369, 32-41)と述べて

6) 早坂氏、前掲稿、70ページ

います。第Ⅰ稿が手続き上の煩雑さの指摘に傾いているのに対して、第Ⅱ稿では、2つの叙述を「本質」・「現象」という次元差の問題に一步深めて論じているように思われます。』⁷⁾と、マルクスを非難しつつ、早坂氏の信条、第Ⅱ稿への固執を述べている。もちろん、第Ⅱ稿も第Ⅷ稿も公表を予定しない未定稿であるから、その理由を説明する必要はなかったのである。この非難は、編集者エンゲルスに向けられるべきものであろう。この第Ⅱ稿での文言においても、貨幣流通から切り離すことは、資本の貨幣形態からも切り離すことだとされているのである。

マルクスが「(Ⅰ)総再生産過程における商品資本の現実的素材的変換、(Ⅱ)この素材的変換を媒介する貨幣流通、という2つの部分に分離した方がよいであろう」と述べたのは第Ⅰ稿においてであった。第Ⅰ稿でのこの指摘に基づいて、第Ⅱ稿では「貨幣流通なしの叙述」、「貨幣流通の媒介を伴う叙述」の2つに分けて、単純再生産の分析・叙述をおこなったのである。第Ⅰ稿では、転換を「収入と収入の交換」、「収入と資本との交換」、「資本と資本の交換」として叙述していたのである。この場合、「資本」とは具体的には不変資本であった。こうした転換についての認識は、第Ⅱ稿に基本的には引き継がれていたのである。

第Ⅱ稿で、マルクスは「流通する貨幣量は、明らかに、それが流通させる社会的生産物の価値のいかなる部分をも形成しない。」と述べているが、それは社会的生産物のうちに金生産を含めない場合にのみ言いうることで、第Ⅱ稿では採り上げられなかった問題である。また、マルクスは、「もし総生産物の価値がどのように不変価値等々に分割されるのが問題となるならば、この問いそのものが、貨幣流通には関係がない。」と述べているが、それはその通りである。しかし、「問題を貨幣流通への顧慮ぬきに取り上げた後にはじめて、どのように現れるかが考察されるべきである。」と述べているが、こうしたマルクスの言では、貨幣はたんなる流通手段として捉えていることになる。したがって、第Ⅱ稿は第Ⅰ稿の残滓を残しているのである。こうした把握を止揚して第Ⅷ稿が書かれたのである。

さらに、早坂氏は、次のマルクスの文章を第Ⅱ稿から引用して自説を補強している。

「われわれは、ここでさし当たり 再生産過程を貨幣流通抜きに考察する。したがって、可変資本の前貸しを、貨幣資本の介入なしに考察する。富の総体は、ここでは株式会社とみなすべき総資本家階級の所有のもとにある。その一部は、彼らの生産ファンドの中の生産資本という姿で存在する。他の一部は商品市場にある（市場は、ここでは個々の資本家が自分の商品を並べる、彼らの共同のバザールとみなされる）。彼らは、したがって資本の可変的部分を、——貨幣流通を度外視するというここでなされた想定のもとでは——ただ消費手段の形態でだけ前貸しすることができるに過ぎない。彼らは、300£の価値の消費手段をとりだして、それで300£の労働力を買う。この労働力は、いまや、彼らの生産資本の一部を構成し、生産過程に合体されて、自ら活動する労働力として生産過程におけ

7) 早坂氏、前掲稿、80ページ

る可変資本の現実的・素材的定在を構成する。生産物、すなわち商品資本においては、前貸しされた労働力の価値が再生産され、＋剰余価値となる。そしてこれが資本としての資本の流通とみなされる。』⁸⁾と。

ここで、マルクスが想定しているのは、資本家階級は、消費手段の現物形態で可変資本を労働者階級に引き渡すとされているのである。こうした非現実的想定は、資本主義的生産関係のもとでは資本・賃労働関係は貨幣関係としてあらわれるという資本主義的生産様式の根本的特徴が疎外されているのである。したがって、可変資本は消費手段という商品形態で前貸しされて労働力に転化され、生産過程の中において商品形態で可変資本価値＋剰余価値を生みだす。そして、こうした可変資本の形態転換が「資本としての資本の流通」と見なされるとしているのである。ここでは労働力価値の転換と可変資本の形態転換の絡み合いは問題とされていない。つまり「資本」と「収入」とは区別されないしているのである。マルクスは、自ら立てた「貨幣流通なしの叙述」という想定に束縛されているのである。

したがって、早坂氏が、「ここでは、明らかに、「貨幣資本の介入なし」の「可変資本の前貸し」、その「労働力」への、「自ら活動する労働力」への、すなわち「可変資本の現実的・素材的定在」への転化、ついで商品資本としての「労働力の価値…＋剰余価値」へという、「資本としての資本の流通」(＝循環)が、資本家・労働者による消費手段の消費(食い尽くし)とは区別されて明快に描かれています。』⁹⁾というのは、早坂氏が第Ⅱ稿に固執しているからに過ぎないからである。

3. 早坂氏の第Ⅱ稿の体系論理

早坂氏は、「第Ⅷ稿の単純再生産に関する最終叙述において、マルクスが総括的に述べていることは、「一方にとって資本であるものは他方にとっては収入であり、またその逆である、という…通説的な見解——は、部分的には正しいとしても、もしそれが一般的に提起されれば、たちまちまったくまちがいになる——つまり、年間の再生産に伴って行われる全転換過程の完全な誤解を含んでおり、したがってまた、部分的に正しいことの事実的基礎に關しての誤解を含んでいる。」(MEGA² II/11, S.780.31-38)ということであって、「けつして「資本」と「収入」という捉え方を全否定しているわけではないのです。』¹⁰⁾と述べている。

「一方にとって資本」であるものが「他方にとっては収入」であるという見解は、例えば、資本家にとっては可変資本である貨幣資本が労働者にとっては収入つまり労賃となる、ということであり、このような見解は部分的には正しい、つまり、一方での貨幣形態での可変資本が他方では労働者の収入となるということであるが、このような見解は再生産過程における転換過程の完全な誤りを含んでおり、その事実的基礎についての誤解も含んで

8) 早坂氏、前掲稿、81ページ

9) 早坂氏、前掲稿、同上ページ

10) 早坂氏、前掲稿、81-82ページ

いると、マルクスは批判しているのであって、「資本」と「収入」の区別という捉え方を否定しているのではなく、その同一視を批判しているのであって、可変資本の形態転換と労働力価値の転換とは、厳密に区別すべきであると批判しているのである。

さらに、このことに関連して、伊藤が「 $I(v+m)=IIc$ は両部門間の価値的対応関係にすぎない」と述べたことに対して、早坂氏は、この対応関係は、「それが、再生産を2大資本グループ間の関係として見ていく場合のもっとも基本的・本質的な前提条件であることを、伊藤さんは事実上肯定していることになります。つまり、貨幣抜きでまず捉えられる「両部門間の〔素材・〕価値的対応関係」、つまり資本関係の自立性・自己完結性 Selbstvollendung を保障する全体としてのバランス＝均衡関係の確立が前提にあって初めて、資本の生産物の各構成部分の確実な実現が保証され、それに裏付けられて、それらの貨幣化や貨幣資本としての再投下も可能になると言ういわば立体的・重層的関連にあることを、外すわけにはいかないからです。』¹¹⁾とのべている。

単純再生産において、 $I(v+m)=IIc$ という対応関係が前提とされているのは、単純再生産という抽象的な想定のもとで論じられているからである。したがって、総生産物の実現が前提され、この総生産物が実現されれば、資本は再び最初の存在形態に復帰することが前提されているからである。そうでなければ、単純再生産は不可能だからである。それと同時に、こうした関係はいかなる生産様式においても単純再生産が行われる限り、共通な関係である。したがって、この関係が特殊資本主義的關係として現れてくることが解明されるべき課題である。つまり、資本・賃労働関係としての資本主義的生産関係の再生産の解明である。

早坂氏は、「貨幣抜きの叙述」と「貨幣流通を伴う叙述」という二重の叙述を、[立体的・重層的関連]と呼び、「貨幣抜きの叙述」が基礎であるとしている。この点について、早坂氏は、「もちろん、事柄の重層的把握という体系的方法からいって、そうした超歴史的な再生産という側面の把握が奥底にあることは否定できないとはいえ、けっしてそこにすべてが還元されてしまうことにはなりません。』¹²⁾と述べて、第Ⅱ稿の「幣なし」叙述から、次の引用を行っている。

「労働者階級Ⅰの年生産物価値のこの部分 $[v]$ によって、資本家はたえず、この価値と剰余価値を生産する労働力を再購買する。部類Ⅰの労働者階級は、ただこれらの生活手段を受け取るだけであり、この価値と引き替えにたえず資本家階級Ⅰに彼ら自身の労働力を引き渡すことによって、それらを商品市場で自分の消費ファンド向けに獲得する資格 Fähigkeit を受け取るだけである。100£の v に等しいこの生産物部分の消費は、かくして、それ自身のうちに、次のことを含んでいる。すなわち、1) これら諸商品の消費、それらが商品市場から引き離されて労働者階級Ⅰの消費ファンドに入ること、2) これらの商品の消費による労働者自身の再生産、3) 彼らの賃労働者としての再転化と不断の存在、つ

11) 早坂氏、前掲稿、同上ページ

12) 早坂氏、前掲稿、82ページ

まり、彼らによって生産された商品量のこの部分の価値と引き替えに彼ら自身の労働力を資本にたえず繰返し販売することによる再転化、したがって可変資本価値の労働力への転化と、その労働力による同じ価値の補填とによる再転化、とである。この労働者の消費過程は、資本の可変的成分の補填また不断の再生産を伴い、かつそれによって条件付けられている。」(Ms.II 原 S.144; MEGA² II/11, S.375.13-30)

ここでは、生産部門 I (消費手段生産部門) が取り上げられているのであるが、資本家階級と労働者階級との関係は、『資本論』第 1 部をすでに完成しているマルクスにとっては自明のことである。したがって生産の資本主義的性格は、ここでは前提されている。しかし、総商品生産物の価値的諸構成部分の流通・転換によって、商品 W' の転換、貨幣化によって媒介されているのであって、再生産論においては、いかにして総商品生産物が実現されるのか、それは資本の循環と労働力価値の流通、転換、つまり収入の流通とどのように絡み合っているのかが解明されなければならない。「貨幣流通抜き」の叙述では、こうした課題の解明は不可能なのである。ここでは、資本家にとっての資本、可変資本は労働者にとっての収入と見なされ、それ故に、第Ⅷ稿での書き直しが必要であったのである。

さらに、早坂氏は、第Ⅱ稿の「貨幣抜き」の叙述から、次の文章を引用している。

「この資本は、2つの構成部分に分かれる：[第Ⅰには] 可変資本に。この部分は、価値から見れば、その資本によって利用される社会的労働力の価値、すなわち、資本によって雇用される全労働者の諸賃金の価値の総額に等しい。素材の面から見れば、それは、活動する労働力、すなわち資本によって動かされる生きた労働そのものからなる。」(Ms.II 原 S.142; MEGA² II/11.S.371,1-6)

これは、可変資本を価値量および素材の面から定義しているだけであって、筆者に対する批判とはなんの関係もない。可変資本の価値額は労働力が価値通りに支払われるという前提の下では、資本によって雇用される全労働者の諸賃金の総額に等しいことは自明であるが、ここではその大きさが問題とされているに過ぎない。可変資本はまず貨幣形態で現れて労働力に転化され、生産資本を構成するが、再生産論ではこのことが問題とされねばならない。

さらに、早坂氏は、次の引用を行っている。

「年々の(当該年間に生産された)総商品生産物に関してみれば、……生産手段のために利用された労働力の価値は、こうして、生産物価値の一部分をなし、また、再び生産物価値の一部分として、消費手段の価値の一部分として、存在する。だが、決して労働力そのもの、つまり労働者も、活動する労働力も、商品生産物の部分として再び存在するのではない。活動する労働力、つまり生きた労働は、生産過程だけに属するのである。労働は、その結果である生産物の中に消え失せる。それは、その生産的形態で、ただ資本の機能として、彼に体化されている動力として、働くに過ぎない。労働は、決して資本によって生産された商品資本の要素をなすものではない。他方では、しかし、資本は自分と並んで市場に賃労働者を見いだすということが想定されている。そうでなければ、資本は労働力を自分に合体させることはできないであろう。他方では、諸商品(固有の意味での)と同じ

ように労働者も過程の生産物として現れるということもまた明らかである。なぜなら、彼らに割り当てられる消費手段の消費によって労働者は自己を維持し再生産し、過程の全機構の作用の結果として、……これらの労働者は結局市場に賃労働者として再び現れることになるからである。したがって、事実上、全過程を考察するなら、労働者はすなわち賃労働者として再生産され、生産手段（および生活手段）は資本として再生産される。しかし、労働者も——況や労働そのものも——、その価値が商品生産物の価値構成部分の役割を演ずるとはいえ、商品生産物の構成要素の役割を演ずるものではない。（Ms. II 原 S.142-143; MEGA² II/11, S.371.13-14）

ここでは、生産手段生産部門の可変資本と労働者の関係が論じられているのであるが、生産手段生産部門では、労働力は生産過程で可変資本価値と剰余価値を生み出すが、この可変資本は生産手段という商品生産物の一部をなしている。しかし、ここでは可変資本の労働力への転化は前提されているだけで、生産物の一部としての可変資本が労働力の価値と同一視され、続いて「また、再び生産物価値の一部分として、消費手段の価値の一部分として、存在する」と言われているだけで、生産手段生産部門の可変資本の転換と労働力の転換は論じられていない。生産手段生産部門で利用された労働力の価値は、商品生産物の中の商品形態での可変資本として現れているのである。この可変資本価値と労働力価値が同一視されているのである。この生産手段生産部門の可変資本と労働力価値の転換は消費手段生産部門の不変資本の転換と絡み合っているのであるが、そのことは論じられていないのであって、再生産論過程の考察とはそれ自体としては無関係である。これは、「貨幣流通なしの叙述」の限界を示している。それと同時に、ここではマルクスは可変資本と労働力との区別を明らかにしようとしているのであるが、労働者も過程の生産物として現れるのは、「過程の全機構の作用の結果として」労働者は賃労働者として再び現れるとしているだけで、可変資本の転換と労働力との転換が論じられているわけではない。しかし、この区別を明らかにし、貨幣資本と労働力の転換とを区別しようという意識が第Ⅷ稿での二部門間の転換を第Ⅰに取り上げることになったのであろう。早坂氏が、自説を補強するために、このマルクスの文言を引用しているのは、早坂氏は第Ⅱと第Ⅷ稿部での再生産論の視点の違いを理解していない、ということに基づくものであろう。

早坂氏は、第Ⅱ稿の非現実的な「貨幣流通抜き」の叙述が「本質」で「貨幣流通の媒介を伴う叙述」はその「現象」であるというのであるが、そうであるならば、最初から貨幣流通の媒介を顧慮して両部門間の転換と消費手段生産部門内部での転換を取り扱っている第Ⅷ稿の分析は「本質」抜きの現象論なのかという筆者の質問に対して、伊藤の判断は飛躍している、どうしてそうなるのか、と言って、次のような教示をたれている。

「もしかすると、「現象 *Phänomen, Erscheinung*」という言い方を事柄のもっとも表面的な事象＝「仮象 *Schein*」や「表象 *Vorstellung*」と取り違えて、私が貨幣流通などは、外見上そう見えるだけの、本質とは無縁のもの、あるいは多くの夾雑物によって歪められた、表層にある異質物に過ぎないと見なして軽視ないし無視してでもいるかのように受け止め、そのようなとらえ方は「誤り」という断定にいたったのかかもしれません。」¹³⁾と、憶測した

上で、次のように教示をたれている。

「しかし話はまったく逆のことです。本質的な諸関係を論理的にもしっかりと捉えて初めて、それに基づいて内在的に展開される「現象」は、「本質」を自己の契機として含み、かつそれによって裏付けられるとともに、その次元独自の新たな諸関係をも「現象」ないし「新たに現出する諸規定」として措定していく、ということに他なりません。しかも、私が「相対的に具体的な（現象）」（《経済》P.154上）と書いたように、「本質」と「現象」とは決して2層だけの関係ではなく、多層・多次元にわたる展開関係を含んでおり、「本質」と「仮象」と言った2層しかないと捉えることの方が、むしろ皮相な体系観と見なされることになるでしょう。ここでの「本質」とは、2つの資本グループの間の価値・素材両面の相互転換を通して、社会総体の再生産が完結され、したがって自立的に維持されることを明確にすることであり、「現象」とは、その関係を堅持し、それによって裏付けられる形で、貨幣がそれを媒介する独自の運動（貨幣の自立化を含む）を展開する、その諸形態を捉えることです。「本質」から「現象」へ、「抽象」から「具体」へと進むに従って、以前の諸カテゴリーをうちに含んで、内容は豊富となり、重くなって行くわけです。」¹³⁾

このように、早坂氏は、「本質」と「現象」という言葉の意味を説かれているのであるが、伊藤が問題としたのは、第Ⅱ稿での「貨幣流通なしの叙述」と「貨幣流通の媒介を伴う叙述」との関連を、第Ⅱ稿に即して説明されることであったのであり、回答にはなっていない。早坂氏は、「本質的な諸関係を論理的にしっかりと捉えて初めて、それに基づいて内在的に展開される「現象」は、その次元独自の新たな諸関係をも「現象」ないし「新たに現出する諸規定」として措定していく」と述べているが、「現象」において「新たに現出する諸規定」は早坂氏の「本質」とは異なるが、やはり、「本質」ではないだろうか。「本質」と「現象」とは異なるものであり、「現象」のうちに「本質」を探求するのが分析的方法なのではないか。筆者は、第Ⅷ稿をそのように捉えている。

また、早坂氏は、「「本質」と「現象」とは決して2層の関係だけではなく、多層・多次元にわたる展開関係を含んでおり」と述べられているが、第Ⅱ稿の単純再生産論は「貨幣流通の媒介なしの叙述」と「貨幣流通の媒介を伴う叙述」の2層からなっており、この両者は「本質」と「現象」としてどのような関係にあるかを問うているのである。早坂氏は、「ここでの「本質」とは2つの資本グループの間の価値・素材両面の相互転換を通して、社会総体の再生産が完結され、したがって自立的に維持されることを明確にすることであり」と述べているが、「2つの資本グループの間の価値・素材両面の相互転換」とは、 $1(v+m)=IIc$ の転換を意味するが、この転換は貨幣流通の媒介なしには不可能なのである。さらに、消費手段生産部門内部での転換は、2つの資本グループの間の相互転換ではない。

さらに早坂氏は、「現象」とはその関係を堅持し、それに裏づけられる形で、貨幣がそ

13) 早坂氏、前掲稿、84ページ

14) 早坂氏、前掲稿、84-85ページ

れを媒介する独自に運動（貨幣の自立化を含む）を展開する、その諸形態を捉えることで。」と説明しているが、「貨幣がそれを媒介する独自の運動」は、再生産論の「本質」をなす契機ではないか。そこでは「貨幣の自立化」ではなく、貨幣は可変資本としては貨幣資本として規定性を持って、労賃の貨幣形態としては貨幣・流通手段という規定性を持って流通するのである。

さらに、早坂氏は、「本質」から「現象」への上向を「抽象」から「具体」への上向と言い換えて、マルクスから、「直接に消費手段——食料品、衣料品など——を供給する全生産諸部門は、社会的観点から見れば、唯一の生産部門、ひとつの種属 *Gattung*（きわめて多種多様な種や亜種からなるとはいえ）すなわち消費手段を構成する。」（Ms.II, 原 S.142; MEGA² II/11, S.370.31-35）という「抽象」とも対応していますと述べて次のように述べている。

「つまり、ここでは個別的諸資本を直接扱うものではない、ひとまとまりの「群」——部門——として扱うのだと、という方法上の枠組みです。だから、消費財生産手段部門（「消費財生産部門」の誤りか—伊藤）では、一括して「階級としてまとまった労働者たちによって消費された量は、彼らによってまとめて生産された商品量の一部をなす」（Ms.II, 原 S.143-144; MEGA² II/11, S.374.37-39）という扱いとなり、そこから、「全労賃が労働者によって消費され、全剰余価値が資本家によって消費されることが前提されているので、実際にすべてが入り込むような、商品の現物形態で存在する」（Ms.II, 原 S.143-144; MEGA² II/11, S.374, 37-39）という規定も可能になるわけです。」¹⁵⁾と。

さまざまな消費手段を生産する個別的諸資本を消費手段生産部門として一括することは「抽象」ではないだろう。それは、個人的消費に入る商品を生産している生産部門として一括されただけである。個別諸資本の集合を考察するここでは、生産される諸商品は、その使用価値から見れば、生産的消費に入るか個人的消費に入るか、いずれかであるので消費手段生産部門と生産手段生産部門とに、一括して分類することが可能なのであり、それは何ら「抽象」と言うことにはならない。社会的総資本は個別諸資本の集合であり、その再生産を個別諸資本の循環の絡み合いとして分析するための方法的枠組とは、個別諸資本の循環はそれの一部であり、またそれによって規定されていることを明らかにすることである。

全労賃が労働者によって個人的に消費され、全剰余価値も資本階級によって個人的に消費されるという単純再生産という前提のもとで、生産物の一方の部類が消費手段という現物形態から成り立っているということは、なんら「規定」というものではない。それはそのような現物形態で存在していると指摘しているだけである。

さらに、早坂氏は、「こうした抽象の下での考察には、多かれ少なかれ実際の現れ方とは異なった設定や想定が含まれることは当然避けられないことです。マルクスは、「消費手段を生産する資本家たちの部門全体を考察するならば、……彼ら是一緒に、自分自身の

15) 早坂氏、前掲稿、85ページ

総生産物の部分を食い尽くすのであり、その価値は、この総生産物に込められている剰余価値に等しい」(Ms.II. 原 S.143; MEGA 2 II/11, S.373.30-33)というとならざるを得ませんし、個々の労働者にとっては、彼らが消費する生産物は彼自身が生産した生産物とまったく重ならないか、ごく一部が一致するに過ぎない。しかし階級としてまとまった労働者たちによって消費された量は、彼らによってまとめて生産された商品量の一部をなすに過ぎない。」(Ms.II. 原 S.143-144; MEGA² II/11, S.374, 35-39)ということになります。これらの想定も、伊藤さんにとっては「非現実」な、したがって「誤った」想定ということになるのでしょうか。』¹⁶⁾と、憶測に基づいた非難を投げかけている。

しかし、消費手段を生産する資本家たちが部門全体で、自分自身の総生産物の剰余価値に等しい部分を食い尽くすと言うことは、前提からくることで、「実際の現れ方とは異なった設定や想定」というものではない。実際には、これらの資本家たちの個人的消費は、これらの資本家たちの間での流通に媒介されるということとは異なっているということであれば、そうであるが、それはそういう前提で議論が行われているわけでない。また、労働者たちについても同じである。早坂氏の非難は、伊藤は単純再生産という前提自体が誤った非現実的な想定だと主張しているという憶測に基づくいわれなき非難である。

最後に、大谷、伊藤の主張、マルクスは第Ⅱ稿の二分法を揚棄したのだという主張は、「エンゲルスの序言における二分法廃止の宣言の正当性を補強する根拠付けの試みであったと思われます。ようするに、それらは、個別的諸資本と社会的再生産過程との次元差を無視したマルクスの平面的解釈と entweder-oder 型の問題の一面化であり、それにもとづく問題全体の二者択一への置き換えと歪曲に基づくものに他ならないと思われるのです。』¹⁷⁾と大谷、伊藤を総括的に非難し、第Ⅱ稿の二分法は誤りではなく、展開の科学的方法であるとしているが、これはマルクスの第Ⅷ稿に対する批判である。

『資本論』第2部の編集者エンゲルスは、序言で、マルクスは拡大された視野に対応するように書き直したのだと指摘しているが、拡大された視野の内容を指摘しているわけではない。それ故、マルクスの「拡大された視野」とはいかなるものであるのか、第Ⅱ稿から第Ⅷ稿への展開・発展の内容はどのようなものであるのかが問われなければならないのである。総じて、問題についての新しい観点がなければ書き直しは必要がないからである。

早坂氏は、第Ⅷ稿で新たに展開されたのは「固定資本の更新」と「拡大再生産」であるとして、両部門間の転換、第Ⅱ部門内での転換は第Ⅱ稿の貨幣流通を追加した叙述の単なる書き直しと見て、第Ⅷ稿で展開された新しい観点には目をつぶっているのである。それ故、貨幣流通は転換を媒介する単なる流通手段の流通に過ぎないと見る山田盛太郎以来のいわば通説的見解の流れの中で、大谷、伊藤の見解を批判しているのである。

「拡大再生産」については、第Ⅱ稿では単純再生産の場合と同様に二重の叙述で展開することを意図していたのに、何故に書かれなかったのかと言うことが、最大の問題である。

16) 早坂氏、前掲稿、85ページ

17) 早坂氏、前掲稿、87ページ

明らかにマルクスはここで挫折したのである。拡大再生産分析では単純再生産を超える余剰生産手段の存在にくわえて蓄積資金の形成の問題が展開されなければならない。それは「貨幣流通の媒介なしの叙述」では不可能である。こうして、新しい観点に基づいて第Ⅷ稿が書かれたのである。

4. 「貨幣抜きの叙述」の積極的意味とは何か

早坂氏は、大谷氏に対する批判において、「まず「貨幣抜き」の全社会的バランスと自己完結の確認、ついで、「貨幣あり」のバランスと自己完結性の確立、さらに「貨幣蓄蔵」を含む全運動のバランスと自己完結性の貫徹と、一貫した全体的均衡の抽象的枠組みの中で、階梯的に再生産の具体的様相を一段一段展開していく体系的方法を貫いている……しかも、そのバランスは、自立的全体ゆえの、そして価値関係を体系的に貫徹していくためのいわば不可欠の体系的方法上の要請（Sollen）＝法則としての均衡にあるのです。」¹⁸⁾と、述べている。

これは、早坂氏の体系観を披瀝したものであるが、「「貨幣蓄蔵」を含む全運動のバランスと自己完結性の貫徹」と言われるときの「貨幣蓄蔵」とは固定資本の更新にさいしての固定資本の現物補填と貨幣補填＝貨幣蓄蔵を念頭に置いているものと思われる。しかし、これまで問題となったのは、第Ⅱ稿の「貨幣抜きの叙述」と「貨幣流通の媒介を伴う叙述」であって、そこには固定資本の更新、「貨幣蓄蔵」は論じられていない。それは第Ⅷ稿において初めて論じられたのである。

さらに、早坂氏は、「全社会的バランスと自己完結性」を強調し、「そのバランスは、自立的全体ゆえの、そして価値関係を体系的に完結していくためのいわば不可欠の体系的方法上の要請＝法則としての均衡である」と言われるのであるが、全社会的バランスと自己完結性を前提としているのは、対外貿易を捨象しているからで、固定資本の更新の分析では、一方的販売による貨幣蓄蔵と一方的購買による現物補填が論じられ、こうした販売と購買との分離が不均衡を生み出すこと、それは観念的な正常生産を前提する場合にも、すなわち社会的資本の単純再生産の場合にも生じうるし、生じざるをえないと、マルクスは指摘しているのである。

早坂氏は、大谷、伊藤は、第Ⅱ稿での「「貨幣抜き」＝「非現実」という理解自体が、およそ科学的思考を通した「抽象」と「次元的な認識」、そして体系を捉えるための抽象から具体への「次元・階梯的な内在的論理展開」という方法そのものを否定する、乱暴な議論といわざるを得ません。」¹⁹⁾と、伊藤は、「次元・階梯的な内在的論理展開」という方法を理解しているとするのであるが、マルクスが第Ⅱ稿までの把握を自己批判したのは、新しい観点・視野に基づくもので、それは第Ⅰ稿以来の資本と収入の同一視を自己批判したのであって、そうした新しい観点に基づいて第Ⅷ稿が書かれたのである。「貨幣抜き」＝

18) 早坂氏、前掲稿、87-88ページ

19) 早坂氏、前掲稿、88ページ

「非現実」という観点からマルクスの自己批判を評価したわけではない。

そうした早坂氏の観点から、「マルクスが単純再生産は「一つの抽象 eine Abstraktion」であり、資本主義的基礎の上では「奇妙な仮定 befremdliche Annahme」だが、蓄積の「現実的要因 realer Faktor」だという時、第Ⅱ稿で、資本家階級Ⅱ（生産手段生産部門）が労働者に彼自身の生産物を与え、労働者階級Ⅱはそれを生産物Ⅰ（消費手段）という、一見奇妙で非現実的な設定をここではまだ貨幣流通を捨象しているからだと添え書きしている（Ms.145; MEGA² II/11, S.378, 14-19 参照）のと同様の方法を用いて事の本質を捉えているのですが、「貨幣抜き」＝「非現実」論の手法でいくと、したがって「貨幣抜き」の叙述は誤りだ、だから捨て去り、「自己批判」すべきだという論法で、全否定されることになるのです。なぜマルクスがあえてそのような設定や論法を行っているのかは問題にされないのです。」²⁰⁾と伊藤批判の論を進めている。

資本主義的生産の基礎の上では単純再生産は「一つの抽象」であるといわれているのであるから、この「抽象」から「具体」への展開は、単純再生産から拡大再生産への上向に他ならない。それ故にこそ、単純再生産は「一つの抽象」であり、現実の資本主義的生産からの「抽象」なのである。「貨幣流通抜きの叙述」から「貨幣流通に媒介された叙述」への展開が「抽象」から「具体」への展開であるのではない。「貨幣抜き」の議論が非現実的であることは確かであるが、マルクスが自己批判したのはそんなことではない。

早坂氏は、さらに、「第Ⅱ稿の「貨幣抜き」の議論は、それほど単純なものではありません。その論旨を追ってみますと一つの種族 Gattung をなしている消費手段生産部門について、資本の2つの構成部分（可変資本＝労働力と不変資本＝生産手段）を規定することから始まり、それが生み出す商品生産物の価値については、必要労働と剰余労働がそれぞれ体化された労働力の価値と剰余価値をなしていること、また他の一部は生産に費やされた生産手段の価値からなること、など、周到な説明を行っていることがわかります。労働者・資本家が自己の生産物を「直接食い尽くす aufessen」（Ms.II. 原 S.143; MEGA² II/11, S.373, 14-19 参照）のだが、とりわけ、「流過程の媒介なしに再生産過程を考察しているこの場所では、…総生産物Ⅰの一部を労働者たちの消費のために引き去ることは、可変資本の再補填を伴う」（Ms.II. 原 S.144; MEGA² II/11, S.375, 1-5）と述べて、「貨幣抜き」の議論における労働者の消費財の消費と資本の運動としての可変資本の補填（労働力そのもの）とを厳然と区別し、かつ関連づけて叙述していることが注目されます。」²¹⁾と述べている。

しかし、マルクスが第Ⅷ稿で問題としたのは、可変資本と労賃との区別であって、このような可変資本＝労働力という把握を自己批判したのである。生産物の価値が不変資本価値＋可変資本価値＋剰余価値からなっていることは『資本論』第1部ですでに解明されているが、不変資本価値＋労働力価値＋剰余価値からなっているのではない。可変資本はい

20) 早坂氏、前掲稿、88ページ

21) 早坂氏、前掲稿、88-89ページ

までは、商品形態での生産物価値の一部分をなしているのである。したがって、ここでは、労働者の消費財の消費と資本の運動としての可変資本の補填とを厳然と区別してはいないのである。それゆえに、新しい視野・観点からの書き直しを第Ⅷ稿で行ったのである。

さらに、生産手段生産部門については、早坂氏は、「[生産手段の生産1]」では、反対に価値生産物である必要労働と剰余労働の価値部分は、個人消費に入り込まない生産手段からなる、資本家階級Ⅱは、資本家階級Ⅰと同じように、労働者に彼自身の生産物の一部分をゆだねることによって、労働力の代価を支払う——彼らの支払い金[この場合現物]を前貸し、かくして自分の可変資本[労働力]を補填する——。(想起するように、ここではまだ貨幣流通を捨象している。)しかし労働者階級Ⅱは、200£の価値の生産物1と交換しなければならない。」(Ms.II. 原 S.145; MEGA² II/11, S.378, 14-19)と。これまた、まことに「非現実的」な想定がなされています。……しかし、そうした抽象という設定をすることで、ここでは社会全体のバランスの貫徹という本質的な法則を確認できます。』²²⁾と述べている。

これによって見ると、マルクスが、貨幣流通抜きで生産手段生産部門の可変資本の転換と労働力価値の転換を論じているのは、早坂氏も「非現実的」想定と考えられている訳である。しかし、早坂氏は、それを「抽象」と強弁し、社会的全体のバランスの確認であるとしているのである。つまり、ここでも早坂氏は単純再生産を均衡論的に理解しているのである。

以上が、第Ⅱ稿の単純再生産についての早坂氏の解説・解釈であるが、早坂氏は、「エンゲルスの序文を絶対視し、これに縛られると、見えるものも見えなくなってくるように思われるのです。これまでの考察でエンゲルスの序文を相対化してみると、マルクスはMs.IIの構成をMs.VIII段階でも堅持していた、という仮説に立った典拠提示の方が、より説得的なものと思われます。』²³⁾と自説を固持しているのであるが、早坂氏は、第Ⅱ稿の「貨幣流通の媒介を伴う叙述」と第Ⅷ稿での単純再生産論を同一平面上にあると理解して、第Ⅷ稿では第Ⅱ稿とは異なった新しい視野・観点から単純再生産を論じていることが理解できなかったことを示している。それゆえに、第Ⅷ稿を主として、第Ⅷ稿で論じられていない論点、それは生産手段生産部門での不変資本の補填であるが、それを第Ⅱ稿から補足して編集したエンゲルスの編集は「本質」を抜きにした「現象」論であると、エンゲルスを批判していることになるであろう。早坂氏の理解ではまず「貨幣流通なし」で「本質」・「社会的バランス」を論じた後に、「貨幣流通の媒介を伴う叙述」へと上向しなければならないからである。

5. 早坂氏の蓄積・拡大再生産論

早坂氏は、「第Ⅷ稿の蓄積論部分でも、章節構成上の区分にはなっていないとはいえ、

22) 早坂氏、前掲稿、89ページ

23) 早坂氏、前掲稿、92ページ

「貨幣流通なし」-「貨幣流通あり」の叙述が事実上重層的になされていることは容易に読み取れます（たとえば Ms. VIII, 原 S. 51; MEGA 2 II/11, S. 791.19-21; MEW 24, S. 486）。また、「貨幣あり」の叙述の中に、蓄蔵貨幣、したがって一方的売りと買い、貨幣資本の独自の役割が大きな位置を占めるようになって、その再生産における意義がテーマとなっていることの強調にも異存はありません。しかし、そこで見られるのは、すでに見てきたように、あくまで全体としてのバランスを基軸とし、その上でこそ成立する、さまざまな変数（蓄積基金の形成と投下、蓄積率、部門編成、資本の有機的構成、剰余価値率、など）の設定とそれらの相互依存関係の追求です。したがって、マルクスの第Ⅷ稿蓄積論での叙述が、しばしば（ときには計算違いの結果として）部分的過剰、アンバランス、矛盾、不合理に終わったとしても、それらは、全体としての自己完結性 Selbstvollständigkeit, 自立性 selbstständigkeit が要請する Sollen との合致を満たさなければならないという枠を外すわけにはいかないことを示しているのです。²⁴⁾と、述べている。

つまり、早坂氏は、明示的に「貨幣あり」と「貨幣なし」の区分はされていないが、それが前提されていると主張しているのであるが、その理由は全体としてのバランスが基軸となっているのだとしているわけである。つまり、早坂氏は、均衡論の立場に立っているのである。また、ここで早坂氏が「貨幣流通あり」としているのは、第Ⅷ稿を単に「貨幣あり」の叙述に過ぎないとしているからであろう。

マルクスが、第Ⅷ稿で問題としているのは、拡大再生産を可能にする剰余生産手段の存在と蓄積基金の形成の問題である。それをマルクスは第Ⅰ部門内での蓄積金の形成と現実的投下、第Ⅰ部門の剰余価値の一部分が第Ⅱ部門の追加不変資本に転換されることによる第Ⅰ部門の蓄積基金の形成、第Ⅱ部門での蓄積金の形成の問題を取り扱っているのである。この主題をはずれては、第Ⅷ稿でマルクスが追求した問題を解明することはできない。それゆえ「貨幣なし」の議論では、この問題を解明することはできないのである。

均衡論の立場からは、エンゲルスが「蓄積の表式的叙述」として掲げた第1例、第2例をマルクスが拡大再生産の均衡的発展・全体としてのバランスを表式的展開通して行っているのだという見解・解釈が流布されてきたのであるが、それはエンゲルスの編集の誤りに基づくものである。およそ、蓄積と拡大再生産過程では、蓄積率、資本の有機的構成、剰余価値率等は可変的なものであって、それを全面的に表式的に表すことは不可能なのである。

さらに、早坂氏は、「貨幣蓄蔵、蓄積基金の積み立てと投下、貨幣資本としての循環の出発等々の貨幣の独自の・自立的意義と役割が、蓄積論では飛躍的に強まっていることを、もちろん否定はできません。しかし、そのことと引き換えに、たとえば伊藤のように「マルクスが〔第Ⅷ稿5〕の(b)の中で論じているのは〈表式による蓄積の叙述〉などというものでは全くなく、二部門間転換において部門Ⅱの一方的購買のための貨幣源泉はどこにあるのか、という問題である」と述べて、5のb)で追求される事柄を貨幣源泉にだけ向

24) 早坂氏、前掲稿、95ページ

かっているとし、そこでは実際には再生産のバランスを保ちつつ、なおかつその枠内で蓄積基金がいかにより一方的販売を通して形成されていくのかを追求する、という風に、前提的・基本的配慮に基づく叙述がなされている部分を、視野から排除してしまうのは、「二者択一型」に置き換えられた逆の極端な一面化ではないか、との訝りを免れないでしょう。」²⁵⁾と筆者を批判している。

二部門間の転換において第Ⅱ部門のための蓄蔵される蓄積基金の貨幣源泉はどこにあるのか、という問題提起は、5)のb)におけるマルクス自身の問題提起である。マルクスが5)のb)において提起した問題は、第Ⅱ部門は拡大再生産のために第Ⅰ部門から追加生産手段を買わなければならないが、第Ⅰ部門のさしあたり蓄積基金の積み立てを行っている資本家は、こうして第Ⅱ部門から来た貨幣を蓄蔵する。つまり、第Ⅰ部門からの一方的販売であり、第Ⅱ部門の一方的購買である。そこで、この一方的購買のための貨幣資本は第Ⅱ部門内でどのように形成されるのかという問題がb)の主題である。マルクスは、この問題は第Ⅰ部門と第Ⅱ部門の転換の問題に他ならないために、いわゆる再生産表式を用いて分析を進めているのである。そして、エンゲルスが誤って「補遺」とした部分は、その総括に他ならない。しかるに、エンゲルスはこのb)におけるマルクスの主題を理解し得ず、マルクスの分析を無視して、表式の「第1例」、「第2例」を作成したのである。

早坂氏は、筆者の見解は一面的であり、社会的再生産のバランスの必要を無視していると非難するのであるが、そうした再生産のバランスは表式作成の与件に他ならないのであって、基本的前提条件ではない。蓄積基金の積み立てと現実投下とが一致するということはあり得ないからである。しかし、表式においては一致するものとして蓄積基金の形成を分析するほかはないからである。マルクスは、それ故、「正常な進行はそれと同数の不正常な進行に、すなわち恐慌の可能性に一変する」と説いているのは、こうしたことを予見して説いているのである。もちろん、それは恐慌論の再生産的基礎、可能性に過ぎない。早坂氏は、恐慌の「可能性から必然性への進展が一步一步進むものであって、表式自体の演繹的展開からそれが達せられるといった一面化に基づくものではないことを、マルクスは見通していたといえます。」²⁶⁾と述べているが、これはマルクスの文言の解釈でないとすれば、いったい誰に向けられたものであろうか。

早坂氏が社会的バランスと自己完結性を説くことは、早坂氏がいかに均衡論に毒されているかを示している。再生産過程は表式に表現されているとして、いわゆる「均衡蓄積軌道論」と言った議論の展開は、我が国における再生産論研究の特徴であるが、早坂氏はこれに与しているのであろうか。いわゆる再生産表式の均衡論的理解は、エンゲルスの編集の誤りに基づくものである。MEGA第Ⅱ部第11巻にマルクスの草稿が公表されたことによって、誤った編集に基づく誤った理解は一掃されなければならないのである。

25) 早坂氏、前掲稿、95ページ

26) 早坂氏、前掲稿、95ページ